

# 文化遺産ニュース

*Cultural Heritage News*  
from NARA

Vol.  
**30**

March 2018

◎ 集団研修	1
◎ 個別テーマ研修(フィジー・バブアニューギニア・ソロモン諸島)	2
◎ 文化遺産 ワークショップ(ネパール)	3
◎ 国際会議「アジア太平洋地域における文化遺産保護人材養成の実情と課題Ⅱ」	4
◎ イクロム (ICCROM) 総会2017	5
◎ 世界遺産教室	5/6
◎ 文化遺産セミナー「よみがえる古都奈良の大塔」	6

カトマンズの旧王宮ハヌマンドカ



# 集団研修

2017年8月29日から9月28日まで、アジア太平洋地域の14カ国から15名の研修生を招き、「木造建造物の保存と修復」をテーマに実施しました。



臨地研修(白川村荻町集落)



臨地研修(薬師寺東塔)



臨地研修(清水寺本堂)

集団研修は、ACCUC奈良事務所が行う人材養成の中核事業です。「木造建造物」と「考古遺跡」というテーマが異なる2種類プログラムを用意して、隔年で交互に実施しており、昨年は前者の年でした。

15名の研修生は、政府機関や大学などで、自国の歴史建造物の保護に従事している若者たち(平均年齢30.7歳)です。また、例年以上に女性が多かった(8名が参加)ことも特筆されます。

従前どおり、プログラム冒頭と最後には、研修の共催機関であるイクロム(文化財保存修復研究国際センター)／本ローマから講師を招きました。

ガミニ・ウイジェスリヤさん(スリランカ)の「アジア太平洋地域の建築文化遺産」や、レイチエル・エガートンさん(ニュージーランド)の「顕著な普遍的価値の陳述と世界遺産条約」の講義をもとに、グループ討議をするなどして議論を深めました。アジア地域全体の、そして世界的な文化遺産保護の最新動向を知る絶好の機会になりました。

またこの研修では、座学形式の講義だけでなく、建物図面の作成や彩色調査などの実習と、実際に修理工事の現場を訪れて学ぶ臨地研修にも力を入れていきます。

今回は、ちょうど保存修理工事が進行中の薬師寺東塔・唐招提寺御影堂・法隆寺中門・清水寺本堂の現場で、解体修理・屋根葺替曳屋(ひきや)・建物をそのままの状態で移動する工法)など、多彩な作業の様子を実見する好機に恵まれました。



彩色調査実習(東大寺持仏堂)

## カリキュラム(概要)

**参加国**  
アフガニスタン・バングラデシュ・ブータン・カンボジア・中国・インド・インドネシア・韓国・ネパール・ニュージーランド・パキスタン・フィリピン・タイ・ベトナム(ベトナムのみ2名参加)

**講義**  
「アジア太平洋地域の建築文化遺産」「日本の文化財保護制度」「日本における木造建築の保存と修理」「建造物修復事業の体制と工事計画」「修理プロセス」「文化遺産の危機管理」「顕著な普遍的価値の陳述と世界遺産条約」など

**実習**  
「木造建造物の記録法(スケッチ実測)」「破損調査と修理方針の策定」「彩色調査と塗装修理計画」など

**臨地研修**  
(奈良県)東大寺・興福寺・薬師寺・唐招提寺・旧田中家住宅・法隆寺(岐阜県)高山市三町伝建地区・白川村荻町伝建地区(愛知県)名古屋城(兵庫県)竹中大工道具館・神戸市北野伝建地区

**報告・討議**  
研修生各国の「木造建造物ほか文化遺産の保存・活用の実情と課題」についての報告と意見交換など



資料調査と保存処理(奈良文化財研究所)

# 個別テーマ 研修

2017年10月10日から11月3日まで、  
フィジー・パプアニューギニア・ソロモン  
諸島から6名の研修生を招き、「博物館  
等における文化財の記録と保存・  
活用」をテーマに実施しました。



臨地研修(天理大学附属天理参考館)



写真撮影実習(奈良文化財研究所)

同じテーマの研修は、2015・  
2016年に続き3回目です。これま  
で南アジアの3カ国(ネパール・スリランカ・  
モルジブ)と東南アジアの3カ国(カンボジ  
ア・ラオス・ミャンマー)が参加しましたが、  
今回は太平洋地域からです。  
はじめは基礎講義です。京都国立博  
物館を訪れて栗原祐司副館長から、2  
日間にわたって、じっくりとお話を伺い  
ました。  
その後は、実践的な実習と、各種の  
特色ある博物館の活動を実際に見て学  
ぶ臨地研修が続きます。  
今回の実習は、事前に研修生の要望  
を受けて、考古遺物の記録と管理の方



土器実測実習(奈良市埋蔵文化財調査センター)

法というメニューを用意しました。発掘  
されて土が付着した状態の遺物を洗浄  
するところから、注記・分類・復元・  
実測・拓本・写真と進め、台帳完成  
に至るまで、5日間かけて、みっちり  
取り組みました。日本流の細やかさに  
多少閉口したかも知れませんが、全体  
の作業の流れが実感できたようで、好  
評でした。  
臨地研修では、研修生出身国の文  
化財を所蔵する博物館も訪問しまし  
た。天理参考館のパプアニューギニア展  
示のコーナーなど、自国のものがどのよ  
うに紹介されているかを、熱心に観察  
している様子がとても印象的でした。

**報告・討議**  
研修生各国の「博物館の実情と課題」についての報告と意見交換

**カリキュラム(概要)**

**講義**  
「日本の文化財保護制度」「日本の博物館制度」「博物館運営」「博物館の危機管理」「博物館の国際戦略」「文化財保護と地域連携」など

**実習**  
「考古遺物の記録と管理」

**臨地研修**  
(奈良県)奈良文化財研究所と平城宮跡資料館・平城宮跡・奈良市埋蔵文化財調査センター！天理大学附属天理参考館／  
(京都府)京都国立博物館・河井寛次郎記念館・二条城築城400年記念展示収蔵館／(滋賀県)滋賀県立琵琶湖博物館／(大阪府)国立民族学博物館／(東京都)東京国立博物館東京文化財研究所



**グリントさん**  
(ソロモン諸島)

臨地研修では博物館運営のヒントをたくさん得ることができました。私の博物館は小規模ですが、帰国後は、学んだことを応用して、日常業務を改善していきたいと思っています。



**ジェトロさん**  
(パプアニューギニア)

博物館資料の管理と活用について実によくのことを学びました。私には新しい知識ばかりでした。自国でも文化財保護は喫緊の課題ですから、研修成果が役立つように努力していくつもりです。



**ナイさん**  
(フィジー)

地域の人たちと一緒に文化財を守る姿勢や努力は、私の目を開かせるものでした。自国の文化財保護には多くの改善の余地があり、日本で経験したことを、少しずつ実践したいと思っています。

**研修生からのメッセージ**

# 文化遺産 ワークショップ

2017年11月15日から20日まで、  
ネパール連邦民主共和国で実施  
しました。



開講式／参加者の皆さん(国立博物館)

今回の研修テーマは、「文化遺産の写真記録とデータの管理活用」です。ネパール政府考古局傘下の各地遺跡管理事務所や博物館から、調査員や学芸員など中堅どころの20名が、首都カトマンズに参集しました。

国立博物館で開講式と予備講義を済ませ、同館と旧王宮、ヌマンドカの2会場に分かれて、実技実習です。

皆さんご存知のとおり、2015年の大地震で、カトマンズは大きな被害を受けました。研修会場となった国立博物館では、収蔵庫が半壊。ヌマンドカでも多くの建物が、部分崩壊しました。目下、日本はじめ多くの国々の協力で、修復が進められています。

修復の作業には、被災前の記録がたいへん役立ちます。しかしながら、ネ



写真撮影実習(国立博物館)

パール国内では、こうした参考資料がきわめて少ないのが実情です。いざという時の備えのためにも、各種文化財の記録の作成は急務です。記録には実測や写真など、いくつかの方法がありますが、今回の要望は、写真記録に関するものでした。

博物館会場では、奈良文化財研究所写真室の中村一郎さんが講師を務めました。土器・石像・木彫・絵画・貨幣などを教材に、各々に応じた撮影設備の仮設から、照明手法、カメラ操作に至るまで、一連の流れを学びました。

ヌマンドカ会場の講師は、文化財写真家の杉本和樹さんです。実際に修復工事が行われている現場に立ち入って、建造物のさまざまな部分の撮影の仕方を体験しました。暗い室内や屋



写真撮影実習(ヌマンドカ)

根裏の木彫装飾など撮影が難しいところでも、絞りとしゃッタースピードの適切な組み合わせや、適当な照明の利用で、質の高い画像が得られることを実感しました。

実習の最後には、研修生各自が撮影した写真のデータを持ち寄り、正確な色再現の処理方法や、デジタルデータの適切な管理方法について学びました。

研修生の多くは、オート以外の設定で撮影した経験がないといえます。露出やシャッタースピードの選択など、カメラに備わっている機能について、よく知らなかったとも話していました。必要な知識と技術が習得できれば、自分のカメラでもより良い画像が得られること、納得の発見でした。



講義の様子(ヌマンドカ)

## カリキュラム

### 講義

「写真撮影の基礎知識」「文化財写真（歴史建造物と博物館収蔵品）撮影概論」

### 実習

「歴史建造物の撮影技法」「博物館収蔵品の撮影技法」「デジタルデータの管理活用」



開会式の様子

# 国際会議

2017年12月19日から21日まで、文化遺産保護に携わるアジア太平洋地域の実務担当者が奈良に集まり、「文化遺産保護人材養成の実情と課題」について議論を交わしました。



総合討議の様子

ACCUN奈良事務所が、アジア太平洋地域の国々を対象に、文化遺産保護に携わる人材の育成に寄与したいと、各種の研修事業をはじめ、18年になります。この間の研修参加者は、500名を超えました。中には、当該国の文化遺産保護の実務の一端で、要職に就き、指導的な役割を果たしている方々も増えてきました。

そこで、2016年と2017年の2か年計画で、そうした代表者の皆さんを再び奈良に招いて、この会議を開催することを企画しました。従前の研修事業の効果を検証して、今後の研修はじめ国際協力事業のあり方や展望について、現在の皆さんの立ち位置から、率直な意見を聞いてみたいと考えたからです。

今回は、ブータン・ネパール・バンダラデン・スリランカ・ベトナム・フィジーの研修生OB・OGと意見交換しま



総合討議の様子

したが、今回は、カンボジア・インドネシア・パキスタン・パプアニューギニア・フィリピンからOB・OGの皆さんが参集してくれました。

本誌でも紹介のとおり、当事務所が毎年開催する研修には、参加者の皆さんを奈良に招いて日本国内で行う「集団研修」と「個別テーマ研修」に加え、海外当該国の現地で行う「ワークショップ」という、全部で3つのコースがあります。

会議参加者の皆さんからは、①「集団研修」が、国情や仕事の環境が異なる参加者が意見を交わしながら刺激し合う絶好の機会になっていること、②「個別テーマ研修」は、参加者の要望に即したオーダーメイドで実践的なプログラム編成が可能であること、③「ワークショップ」は、当該国の現地で行えるので、大勢が参加できることが

大きな利点であること、などの評価を頂戴しました。

あわせて今後は、「基礎コース」や「上級コース」といった、レベルごとのメニュー設定を期待する声なども寄せられました。



参加者の皆さん

**参加者の皆さん**

ガミニ・ウイジェスリヤ（イクロム）  
シモーネ・リッカ、陸 偉（ユネスコ・アジア太平洋地区世界遺産研修研究センター）  
ロビト・ジグヤス（立命館大学）  
ナシル・ムハンマド（インドネシア）  
ベロニカ・タード（フィリピン）  
ブラック・ソナラ（カンボジア）  
タヒール・サイード（パキスタン）  
アロイス・クアソ（パプアニューギニア）  
西村 康（ACCUN奈良事務所）  
稲葉信子（筑波大学）  
金井 健（文化庁）  
近藤光雄（文化財建造物保存技術協会）  
友田正彦、加藤雅人（東京文化財研究所）  
森本 晋（奈良文化財研究所）  
上野邦一（奈良女子大学）  
山口 勇（奈良市教育委員会）



会場から望むパラティーンの丘とチルコマッシモ(手前)

# イクロム総会 2017

2017年11月29日から12月1日まで、ローマにあるイクロム(文化財保存修復研究国際センター)の総会に出席しました。

イクロムはACCU奈良事務所が行う各種事業、特に集団研修と国際会議に際して、大事なパートナーの役割を果たしてくれる国際的な政府機関(IGO)です。日本からも、文化庁が専門の職員を派遣しています。

会場は、例年と同じく、FAO(国際連合食料農業機関)という国連機関の建物でした。ローマ市の中ではやや南寄りの場所で、ローマ時代の遺跡が多く残る地域にあります。屋上からは、南にカラカラ浴場、東にコロッセオとパラティーンの丘、手前にチルコマッシモ競技場跡、東北に目を転じれば20世紀にできたヴィットーリオ・エマヌエーレ2世記念堂、北西にはサン・ピエトロ大聖堂の尖塔というように、名所旧跡の見学を目的に建てたのかと思うほどの立地です。建設時に出土したらしいローマ時代の遺物が、入口近くのガラスケースに展示されていました。

総会は2年に1回開催されますが、今回は第30回目にあたります。毎回、事業と予算についての報告と新年度案が討議の大きな部分を占めますが、理事の選挙も重要な議題のひとつです。今回は、それに加えて、所長の選挙がありました。当選したのはジンバブエ出身のウエバー・シンドロさんで、2018年1月から、デ・カルロさんに代わって、6年間の任期を勤めます。

ヨーロッパ以外から所長が選出されるのは初めてのことで、イクロムがアフ



ACCU奈良(中央:西村所長)の発言の様子

リカ諸国の文化遺産保護に力を入れているという最近の動向と、連動しているようにも感じられました。

最終日には、ACCUも発言の機会を得て、足かけ18年になる研修事業を総括して今後の方向性を探るための国際会議を開催することや、新しく始めた個別テーマ研修の概要などについて紹介しました。

そして、今回でイクロムを退職するガミニ・ウイジェスリヤさんに、長年にわたる奈良事務所への協力と援助に対して、感謝の意を述べました。

## 世界遺産 教室

高校生861名と、小・中学校の先生40名が受講しました。

県内の高校生を対象にした人気の「世界遺産教室」ですが、昨年は9校で開催しました。あわせて、小・中学校で郷土学習や社会科を担当している先生方のための「教室」を2回、教育研究所で開催することができました。

講師は、フリーアナウンサーの久保美智代さん、通訳の小野以秩子さんです。お二人とも仕事の傍ら、毎年いくつもの世界遺産を巡ってきました。久保さんはどうとう、その数400カ所を超えたといえます。

「教室」では、世界遺産条約の成り立ちや仕組み、その意義などについて学びます。講師自ら撮った映像を用い、「おもしろゼミナール」と銘打ったクイズ形式の手法も交え、楽しみながら学ぶ仕掛けがいっぱいです。

加えて、久保さんは、最近訪れた小笠原諸島や石見銀山を、小野さんは昨年長期滞在したドイツを話題に



ACCU奈良 文化遺産セミナー2017

# よみがえる 古都奈良の大塔

2018年1月13日(土)

13:00-16:00(開場12:30)

ならまちセンター  
市民ホール  
奈良市 東寺林町 38番地

賞  
300名  
申込み制  
手続通りあり

主催：(公財)ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所 後援：奈良県、奈良市

# 文化遺産 国際セミナー

2018年1月13日に、奈良市ならまちセンターで、「よみがえる古都奈良の大塔」をテーマに開催し、300名の皆さんが参加しました。

## セミナーの開催案内チラシ



箱崎和久さんの講演の様子

ACCU奈良事務所では、多くの皆さんと一緒に文化遺産保護の大切さを考える機会にしたいと思い、毎年さまざまなテーマでセミナーを開催しています。そうした中、奈良では近年、大塔の発掘が相次いでいます。今回は、これを話題に取り上げてみました。

はじめは、奈良文化財研究所の箱崎和久さんの「大塔の系譜をたどる」と題する講演です。舒明天皇発願の百済大寺で突如九重塔が出現してから、東大寺に代表される平城京の大塔建立までの経緯を詳しく解説くださいました。

続いて、東大寺の南部裕樹さんが「東大寺東塔を掘る」と題し、現在進行中の発掘調査の最新成果を披露されました。奈良時代の創建当初には方五間の平面であった建物が、鎌倉時代の再建時に方三間に改められたことなど、「何故だろうか?」と、新たな興味は



座談会の様子

尽きません。

奈良市教育委員会の松浦五輪美さんは「大安寺の塔を掘る」のテーマで、調査成果をお話くださいました。東西両塔の建立は、東大寺より遅れた模様です。しかも西塔が完成したのは、都が京都に遷った後だといえます。ちょっと意外な新事実発見でした。

プログラムの最後は、お三方の座談会「よみがえる古都奈良の大塔」です。東大寺の塔の高さをめぐる諸説や、日本古代の大塔の源流などについて、意見を交わしました。6世紀末に、朝鮮半島・百済からの技術移転ではじまったわが国古代の寺院建設ですが、一世紀半の時を経て、奈良の都の東大寺で、その巨大な大仏殿や大塔で、大輪の花を咲かせました。参加者の皆さんそれぞれに、往時の光景を想像しながら、楽しい時を過ごされたようです。



西の京高校(久保美智代さん)



高田高校(小野以秩子さん)

挙げ、昨今の様子なども紹介くださいました。

生徒さんや先生方が寄せる関心も、回を追って高くなってきました。質問も多様になってきましたし、「教室」終了後にもしばし、講師を囲む対話の輪ができることがあります。企画への期待と手応えを感じています。

**開催校**  
(奈良県立) 奈良朱雀高校・法隆寺国際高校・畝傍高校・橿原高校・登美ヶ丘高校・高田高校・西の京高校・五條高校 / (奈良市立) 二条高校

# カトマンズの旧王宮ハヌマンドカ

表紙の写真：モハン・チョーク(左)とその上に建つアガンチェン・マンディール  
足場で覆われているのがハヌマン像



「ハヌマン」はヒンドゥー教の猿の神、「ドカ」は門を意味する言葉です。かつて国王の住まいであったこの王宮は、門の脇にハヌマン像があることから、この名で呼ばれることになりました。王宮は、「チョーク」と呼ばれる中庭を囲む建物と、「マンディール」と呼ばれる塔で構成される、木と煉瓦を組み合わせた建物群で、17世紀から19世紀までの間に順次建立されました。ユネスコの世界遺産「カトマンズの谷」を構成する主要資産のひとつです。2015年4月に発生した「ゴルカ地震」で多大な被害を受けましたが、現在、日本を含め数カ国が復興支援事業を続けています。

ワークショップ(本誌3ページに記事掲載)の会場になったのは、17世紀中頃に造営されたモハン・チョークと、これと一連で建てられた三重塔アガンチェン・マンディール(アガンチェン寺)がある一画で、日本のJICA(国際協力機構)が修復支援を実施中の現場を含む場所でした。

モハン・チョークは(北側に連続して建つスナタリ・チョークとともに)、王位に就く者が生まれ、そして亡くなるのが習わしであった重要な建物で、美しい正面が壮観です。そして、アガンチェンの「アガン」は、ネワール語で「秘密の一族神の場」の意味だといいます。王の生活空間と一族神が一体となったこの一画は、王宮の中でも特に大切なところでした。



モハン・チョーク(正面の三階建)と  
三重塔アガンチェン・マンディール(左)

ハヌマン像



## 公益財団法人 ユネスコ・アジア文化センター 文化遺産保護協力事務所

Cultural Heritage Protection Cooperation Office, Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO

〒630-8113 奈良市法蓮町 757(奈良県奈良総合庁舎1階)

TEL 0742-20-5001

FAX 0742-20-5701

URL <http://www.nara.accu.or.jp>

E-mail [nara@accu.or.jp](mailto:nara@accu.or.jp)

### 交通アクセス

- 近鉄奈良駅から
  - 徒歩約20分
  - バス13番のりばから「西大寺駅行き」または「航空自衛隊行き」で、佐保小学校下車すぐ

- JR奈良駅から
  - 徒歩約20分
  - バス西口5番のりばから「西大寺駅行き」または「航空自衛隊行き」で、佐保小学校下車すぐ